

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12790

研究課題名（和文）アリストテレス自然哲学の形成と後期プラトン哲学

研究課題名（英文）The Formation of Aristotelian Natural Philosophy and Plato's Late Philosophy

研究代表者

松浦 和也（Matsuura, Kazuya）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：30633466

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：アリストテレスにとってプラトン『ティマイオス』は容認すべき言説というよりも、むしろ批判し、克服すべき言説であった。しかし、エレア派の思索との対峙を色濃く残すプラトン『パルメニデス』等に見られる「一と多」や「限界」といった抽象的対象に関する発想と形而上学的議論はアリストテレスの自然哲学の形成において既知の前提として機能している。また、プラトン『法律』に見られる自然哲学的基礎概念はアリストテレスの自然哲学的教説の中でかなりの部分が利用されており、プラトンないしアカデメイア内部における議論がアリストテレスの自然哲学の形成の概念的な出発点となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アリストテレスの自然哲学は、彼以前の自然哲学的言説への厳しい批判を含むゆえに、彼独自のものとして解されやすい。しかし、彼自身の積極的な自然哲学的言説の背景を仔細に確認すれば、単なる類似性として軽視することは許されない後期プラトンとの影響関係が見られた。この関係が意味することは、自然哲学を形成するにあたり、観察事実だけではなく、アリストテレスは名指ししてはいないが、彼以前の哲学的言説およびアカデメイア内部での哲学的議論を出発点のひとつとしていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：For Aristotle, Plato's Timaeus is not a natural-philosophical discourse to be criticised and overcome rather than an acceptable discourse. However, Plato's Parmenides and his other late works, which retain a strong confrontation with Eleatic thought, contain metaphysical ideas and arguments about abstract objects, including 'one and many' and 'limits', that serve as known premises in Aristotle's natural philosophy. In addition, Plato's Laws are a significant source of the basic natural philosophical concepts used in Aristotle's natural philosophical doctrines, which were the conceptual starting point for Aristotle's natural philosophy.

研究分野：哲学

キーワード：哲学 ギリシア哲学 方法論 自然哲学 アリストテレス プラトン

### 1. 研究開始当初の背景

アリストテレスの哲学が先行する哲学者の議論に多くを負っていることは、彼がその種の考察で採用した考察方法からも一定の裏付けが得られる。アリストテレスの哲学は「パイノメナを救う」ことに方法上の特色がある。ただし、この「パイノメナ」は「現象」だけではなく、「通念」をも意味すると解さねばならない。そして、彼の倫理学だけではなく、形而上学や自然哲学に現れるパイノメナも「通念」と解するべきものが多い。それゆえ、彼の形而上学や自然哲学は先行する哲学者の通念の上に成り立っている。このことは古代哲学研究者の共通認識となっている。そして、その通念を考察の出発点とすることはアリストテレスにソクラテス以前の哲学の報告者という役目を担わせることになったが、昨今の研究者は彼のソクラテス以前の哲学に関する報告は不正確であり、彼の批判も彼自身の教説(たとえば四原因説)に強引に引き付けられたものと評する傾向が強い。

他方で、アリストテレスの形而上学的著作において論争相手と論争の対象となる学説は比較的明確である。『形而上学』巻や巻に現れるプラトン批判は「イデア論 VS 形相質料論」という図式から「プラトン VS アリストテレス」という図式に読者を誘う。アリストテレス哲学を発展的に理解しようとするとき、アリストテレス哲学の形成過程をプラトン哲学からの離反という形で整理されてきたことも、その図式を基盤としたものだと言えよう。

しかし、一般的に先行する哲学的見解について、それを構成するあらゆる論点を否定することは困難であるし、そのようにすることによる生産性もほとんどないだろう。そうであるならば、プラトンとアリストテレスの関係は、そして初期ギリシア哲学とアリストテレスの関係は、より積極的な仕方では結び付けられ、整理されるべきである。つまり、次のように問われるべきだと思われる。「アリストテレスは、先行する哲学者から正確には何を受け継いだのか」。

### 2. 研究の目的

アリストテレス研究の長い伝統とそこから紡ぎだされる層の厚さを考慮すれば、先の問いに対する十分かつ学術的水準を満たした応答を与えるためには長期間の継続した研究活動が必要である。しかしながら、その土台となる考察をある程度提示しておくことも不可欠と思われる。そこで、本研究はアリストテレスの自然哲学に対して、後期プラトン対話篇が果たした積極的役割を解明することを目指す。この手続きを遂行すれば、プラトン哲学からの離反という形ではなく、プラトン哲学の内化という形でアリストテレス哲学を見つめなおす新たな哲学史理解の道を開くことになる。

とはいえ、この目的には、研究方法の正当化が必要と思われる。なぜなら、次の疑念は形成しうるからである。後期プラトンの自然哲学といえば『ティマイオス』であり、その見解自体もプラトンの積極的見解であるとは言いがたい。というのは、この著作でティマイオスが語る宇宙生成論は「もっともらしい物語」あるいは「もっともらしい説明」として導入されるからである。それゆえ、アリストテレスの自然哲学の形成に対して、プラトンの自然哲学の積極的関与は最初から認めがたいのではないか。

この疑念については次のように応答できる。アリストテレス『自然学』をはじめとした自然哲学的著作には、たしかに『ティマイオス』への明らかな言及が見られるし、「プラトン」「プラトン主義者」と名指して批判対象とすることもある。ただし、本研究は『ティマイオス』で表明される言説とアリストテレスの自然哲学の関係を扱うわけではない。むしろ、アリストテレスの自然哲学を形成する土台となっている形而上学的な思索に対するプラトンの影響を測定するのである。近年の研究は、アリストテレスの自然哲学的考察の細部に『パルメニデス』や『ソフィステース』等のプラトンの後期対話篇に見られる議論との類似点や影響を多数指摘している。

本研究が想定する「積極的役割」とは、アリストテレスの自然哲学の形成における、いわば彼の思考の流れに関与した後期プラトン哲学の役割である。

### 3. 研究の方法

アリストテレスの自然哲学を構成する『自然学』、『生成消滅論』、『天体論』、『気象論』に関する翻訳や脚注および研究書には、後期プラトンとの影響関係を指摘してくれるものがある。本研究は第一に、その指摘を可能な限り手広く集め、アリストテレスのテキストとプラトンのそれとの「対応表」を作成する。次いで、その対応が十分に妥当なものかを検討する。すなわち、どのように読めばアリストテレスの議論とプラトンの議論が接続するか、という観点と、その接続の仕方が期待するそれぞれの議論理解が読み筋として説得力があるか、という観点から、「対応表」に書かれた各事項の妥当性が検討されることになる。

以上の手続きから、アリストテレスがプラトンから引き継いだ哲学的教説を同定し、自然哲学的考察におけるアリストテレスのプラトンの哲学受容の特徴を明確にする。

### 4. 研究成果

本研究は、アリストテレスの自然哲学は後期プラトンの諸議論を下敷きに形成されているこ

とを作業仮説としたが、調査の中でこの作業仮説自体に緊張関係があることが明らかになった。

プラトン『ティマイオス』とアリストテレスの自然哲学的教説との関係を調査した際に明らかになったことは、アリストテレスがプラトンを名指し、その議論を報告する記述は、しばしば正確さを欠くが、アリストテレスの自然哲学的議論の中で論点が飛躍しているように見える議論にプラトンによる論点を導入すると筋が通る場合がある、ということであった。

さらに、アリストテレスの運動変化に関する把握の仕方にも、後期プラトンからの明確な影響が確認できた。アリストテレスは生成消滅とそれ以外のタイプの変化を区分するが、この区分はそれぞれのタイプに対応する変化が自然界に実在するという理由によるのではなく、むしろ「主語と述語」で構成される言語使用と、主語のタイプ分類を基盤とする彼の言語分析に依拠している。もちろん、主語のタイプ分類はいわゆる「カテゴリー」ではあるものの、その言語分析にはプラトン『パルメニデス』が主として展開した「一と多」に関する存在論的議論からの援用が見られた。この援用を哲学史的経緯から捉えなおすと、アリストテレスの質料形相論はエレア派の「ある」の一義性との対決から構想されたものであったが、このアリストテレスの姿勢そのものは質料形相論に限定されるものではなく、彼の自然哲学の広い範囲にも維持されていることになる。以上のことは、対比的に、後期プラトンの諸言説がアリストテレスの哲学体系に与えたものは単純な弁証法的展開ではなく、内在的な積極的役割を果たしていたことを示しうるだろう。

また、プラトンとアリストテレスとの接続関係を再考するための一助として「技術」(テクネー)を取り上げ、近年の技術論や技術倫理で扱われる技術観と対比しながら、その特色と哲学的位置づけを考察した。技術をどのように把握するかという点においては両者の間に一般的説明の重視といった類似性が見られ、さらにこの類似性が自然哲学およびフィロソフィアの理解にも及んでいることが確認できた。

しかし、パルメニデスやゼノンといったエレア派の思索、たとえばゼノンのパラドックスへのアリストテレスの対応を調査すると、該当するテキストは文献学的な難点を抱えており、その難点を克服するための解釈は今なおテミスティオスやシンプリキオスといった古代の注釈の根強い影響を残していた。このことは本研究の問いの核心部分に抵触する。つまり、先述の作業仮説は、アリストテレスの自然哲学をプラトンのように解釈すれば必然的に正当化されることになるが、この正当化は循環している。この循環はプラトンとアリストテレスの接続関係が作業仮説の想定とは異なり、継続的ではないかもしれないという疑義を生んだ。

それでもなお、改めてアリストテレスの自然哲学と後期プラトンの影響関係を俯瞰的立場から整理しなおしたところ、アリストテレスの自然哲学的教説の多くがプラトン『法律』第10巻にも見られることを確認した。『法律』同巻はしばしば神学的議論として扱われるが、自然・技術・遇運という区分や、運動変化の分類、能動受動の関係に関する諸見解、「あらゆるものが運動変化するのか、それとも一部の者が運動変化するのか」といった問いは、アリストテレスの自然哲学的教説とかなりの部分で一致する。もちろん、『法律』の後半はプラトンの真作をしばしば疑われるものであるため、『法律』からアリストテレスへ、という流れ自体には疑義を呈しうるし、類似した哲学的教説がプラトン受容の事例だとは断定もできないだろう。しかし、後期プラトンの哲学的議論がアリストテレスに対して何の影響もなかったと診断することはそれ以上に困難であり、二人の間で論点の共有が起きていたと想定することが自然であろう。少なくとも、アカデメイアで交わされていた哲学的議論をアリストテレスは引き継ぎ、自然哲学的考察に援用した、ということまでは安全に主張しうると思われる。

そのため、本研究は一時、プラトンとアリストテレスの自然哲学的教説の連続性に疑義を呈したものの、次のような影響関係があると結論付けた。自然哲学という枠組みから見れば、プラトン『ティマイオス』はアリストテレスにとって容認すべき言説というよりも、むしろ批判し、克服すべき言説であった。しかし、エレア派的思索との対峙を色濃く残すプラトン『パルメニデス』等に見られる「一と多」や「限界」といった抽象的対象に関する発想と形而上学的議論はアリストテレスの自然哲学の形成において既知の前提として機能している。また、プラトン『法律』に見られる自然哲学的基礎概念はアリストテレスの自然哲学的教説の中でかなりの部分が利用されており、プラトンないしアカデメイア内部における議論がアリストテレスの自然哲学の形成の概念的な出発点となった。

なお、本研究から派生したものとして、以下の成果がある。

1) 本研究の補助作業として、プラトンとアリストテレスの技術(テクネー)把握を精査した。何かを制作する営みに技術を制限する点でアリストテレスの技術観はプラトンのそれよりも狭いが、説明能力や「ある」への言及を含む点で両者は共通する。もちろんプラトンとアリストテレスは「ある」理解が異なるものの、「ある」への視座自体は両者の想定する自然哲学においても求められている。ただし、この技術把握はどこまでプラトンとアリストテレスに独自で固有のものなのか、それとも古典期ギリシアにある程度流布したもので、プラトンとアリストテレスはその把握を言語化したものなのか、という問いが生じることになった。

2) アリストテレスのa)「基体」や「基にあるもの」、あるいは「主語」と訳されるヒュポケイメノンについて、生成消滅とその他の変化を区分する際に用いられるヒュポケイメノンは特定の意味を与えるよりも、文脈に応じて認識論的に議論の中で「指定されたもの」と解したほうが議論に整合する。

3) アリストテレス哲学を分析哲学的に再構成するアプローチにはしばしば過度に議論を単純化した結果、テキストと乖離しているものが散見された。このような乖離は現在の古代哲学研究の方法論的制限ないし限界を示すものだと思われたため、その手法の黎明期であった1970年代の英米圏の古代哲学研究における利点と傾向性を調査した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 松浦和也	4. 巻 66
2. 論文標題 ギリシア哲学とその分析的読解	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 哲学誌	6. 最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松浦和也	4. 巻 4
2. 論文標題 技術の範型<パラダイグマ>	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ひとおもい	6. 最初と最後の頁 143-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松浦和也	4. 巻 56
2. 論文標題 生成消滅とヒュポケイメノン アリストテレス『自然学』第5巻第1章における変化の分類	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 白山哲学	6. 最初と最後の頁 65-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松浦和也	4. 巻 11
2. 論文標題 論証のはじまり 酒井健太郎氏『アリストテレスの知識論』について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際哲学研究	6. 最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松浦和也	4. 巻 11
2. 論文標題 人間並みだが知性から離れたところにある幸せ 古典期ギリシアのエウダイモニア観から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際哲学研究	6. 最初と最後の頁 113-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 松浦和也
2. 発表標題 ギリシア哲学の分析的読解と時代性
3. 学会等名 都立大学哲学会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松浦和也
2. 発表標題 エートス・エコノタ 人間・集団・人工物
3. 学会等名 人間と機械の協同を考える (第10回RSIS研究会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松浦和也
2. 発表標題 二義的な、神々に愛されぬ者たちの幸せ
3. 学会等名 ワークショップ: 思考力とウェルビーイング (オンライン) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松浦和也
2. 発表標題 機械と世界
3. 学会等名 アカデミーヒルズ・JST/RISTEX/HITE 「混沌(カオス)を生きる」(招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 クリストファー・シーلز、文 景楠、松浦 和也、宮崎 文典、三浦 太一、川本 愛	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 400
3. 書名 古代哲学入門	

1. 著者名 河本英夫	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学芸みらい社	5. 総ページ数 308
3. 書名 創発と危機のデザイン	

1. 著者名 松浦 和也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学芸みらい社	5. 総ページ数 256
3. 書名 ロボットをソーシャル化する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------